

研究論文

ある校長経験者からみた島小以後の齋藤喜博の校長像

— 境東小学校と境小学校 —

久保田 武¹

群馬県佐波郡島小学校校長時代（1952～1963）の学校づくりで、戦後の教育界の注目を集めた齋藤喜博（1911～1981）が、島小学校に続いて在職した群馬県佐波郡境町（現在は伊勢崎市に合併）の境東小学校（1963～1964）と境小学校（1964～1969）時代の学校改革から読み取れる校長像を、島小時代と適宜比較しながら提示し、その意義を吟味することがこの小論の主題である。本論の構成は、境東小学校長の時期、境小学校長の時期、筆者のまとめからなる。核心となる境小学校長の時期は、赴任当時の状況とその後の変化を、齋藤と当時の教員の回想を文献に聴き取りを加えてまとめ、それに当時の保護者と在校生の回想を勘案し、最後の筆者のまとめでは文献と聴き取りを総合して考察した。筆者の結論は、境小校長時代の方が島小校長時代より学校経営が安定し、齋藤が境小で取った手法と得た成果は、島小時代のそれと比べて勝るとも劣らない。現在の教育界にとっても学ぶべき遺産であると考えている。

キーワード： 齋藤喜博、島小学校、境東小学校、境小学校、境小の教師たち、武田常夫

1. はじめに

筆者は、日本教育大学院大学紀要第2号（2009年3月刊行）に、「ある校長経験者からみた齋藤喜博の校長像—その光と影」という表題で齋藤の島小時代の実践と校長像を論じた。本稿では引き続き齋藤が島小以後勤務した学校での実践と校長像の変化を論じ、彼が島小以後の学校経営で残した遺産の意義を吟味したい。

このテーマを取り上げた趣旨は、膨大な資料、論文、書籍などが残されている島小校長時代（1952～1963）の実践と比べて、境東小（1963～1964）と境小校長時代（1964～1969）を扱った論文、書籍、資料、関係者の証言は島小のそれと比べはるかに少ない（筆者編「齋藤喜博をめぐる文献リスト作成と主要文献解題」日本教育大学院大学紀要第1号2008年参照）。またこの時期の実践を総合的にまとめた論文、書籍も見当たらない。島小11年間の実践で、全国的に名声を得た齋藤が、

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

それに続く仕事場一境東小（以後東小と呼ぶ）と境小一でいかなる学校づくりをしたかを知ること、学校管理職、父母、学生のみならず、広く教育行政、政治、教育学、報道に携わる人々にとって有益であるとする。筆者が、島小以後に齋藤の校長像がいかに変化したか調べようと考えた目的はそこにある。

この時期を扱った資料がきわめて少ない理由は、島小時代と方針を変えた齋藤が学校への参観者と取材者を原則として断り、公開と外部への情報発信を最小限に抑えたためである。また現在入手できる数少ない資料も、その殆どが齋藤自身または当時の境小教師の記録に限られているので信頼性に問題が残る。というのは、齋藤を批判または自己批判する内容は皆無に等しいからである。そこで筆者はその盲点を補うため、当時の保護者と生徒にも回想を求め（注41、43参照）、さらに当時の境小教師6名から直接聴き取りを行い（注44、45参照）、それらの内容を取捨選択のうえ齋藤本人と配下の教師の文献による回想に加えて総括を試みたしである。

2. 境東小学校長の時期（1963～1964）

（1）島小教育 11年の終わり

1963年、齋藤は11年在職した島小学校から境東小学校長に転出した。この原因は、島小赴任後比較的早くから始まった追い出し運動の延長線上の動きと、同一校校長在任11年という異例の長さであろう。事実島小最後の年には、齋藤自身も「疲れたという感じでいっぱいだった。10年の仕事は、成果があがればあがるほど、私を疲れさせ傷つけてしまった。」¹⁾と書いている。さらに「私は島小が終わりになる準備をしていた。いつ終わっても悔いのないようにと準備をしていた。」²⁾と告白している。

こうして1963年3月末、地方行政担当者から提示された研究所への転出を、島小教育の否定につながる降格にあたり拒否、いったんは4月1日に島小校長として残留する辞令を交付されたが、その翌日（4月2日）境東小校長急死という思いがけない事態が発生、今度は転任を断れないと齋藤も判断、4月3日に境東小への転任辞令を交付された。こうして島小教育の幕切れは思いがけない形で訪れることになった³⁾。

（2）境東小校長としての1年 — たまたまの1年

齋藤の愛弟子の中で最も信頼され業績をあげたのは武田常夫であろう⁴⁾。武田は齋藤が島小校長になった2年後、齋藤の著書と実践の姿勢に心を動かされ、島小に転任して同校を代表する授業指導者になった。その後齋藤が東小へ転任すると1年後に齋藤を追って東小へ移ったが、齋藤は入れ違いに境小へ異動してしまった。もはや齋藤の薫陶を受けることはなからうと、彼を頼る東小の教師と一緒に仕事に打ち込みつつも虚しさを否定できない日々を過ごしていた武田は、2年後思いがけず齋藤の下で再度働けることになった⁵⁾。恐らく齋藤の並々ならぬ尽力が地教委を動かしたものと推

察する。斎藤が境小退職後は、指導主事に転出するまでの2年間、境小で斎藤に代わって授業指導者の役割を演じている。武田はまさに斎藤学校の優等生総代であった⁶⁾。

その武田が「東小という職場は、斎藤にとって島小で疲ついた心と身体を癒すには最適な職場であった。先生たちの大部分は、斎藤先生をよく知り、島小の実践に憧れる先生たちであった。」⁷⁾と書いている。

武田の判断と符牒を合わせるかのように、斎藤自身も生徒数290名、職員数12名という比較的落ち着いた小規模校での校長生活を次のように書いている。

「しばらく私は茫々と過ごしていた。島小11年の仕事を終った疲れで、虚脱したような状態になっていた。学校は形式的には整備されているし、先生たちは真面目だし、事務的なことも教頭が若くてすぐれた人だったので何の心配もなかった。毎日校長室の椅子に坐って茫々と過ごしていた。」⁸⁾と書いている。またそのころ彼が詠んだ短歌「官僚的機構もはじめてのわれは知るただすわりおれば日々が安らかに過ぐ」⁹⁾も彼の当時の心境を投影している。もっともそのようなときでも、年間10回以上全国各地の講演会、座談会、研究会などに出かけており¹⁰⁾、全国行脚の兆しがすでにみられる。

確かに斎藤は、「あと6年ある定年までこの学校にいて、島小とはちがうものをここで創り出そうと決心していた。また1年前に急逝した前校長と東小のそばに住む遺族を考慮し、1年間は前校長がやったことをできるだけこわさないようにしようとした。はじめから私の考えで実践し、どんどん学校を変えていくことはすまいと考えた。」¹¹⁾と心境を吐露している。そうは言うものの、斎藤の影響力と実践力は並みの校長にはとても太刀打ちできないものがあつたようで、次に紹介する武田の観察はその事実を裏付けていると思われる。

武田は斎藤が東小へ異動した1学期半ば、特に許されて研究授業を見に行つた。ところが「若い男の先生—関口先生の授業に、周りで見ている先生たちが遠慮なく横口を出している。後に介入授業ということで行われる教師教育の具体的な方法が、ここでは何の苦もなく行われていた。私の見たところ、横口によって授業がより高度に展開したという事実は見られなかったが、それよりも横口が出せるという、解放された行為自体に研究のポイントが置かれていたらしく、先生たちは関口先生の授業にさかんに意見を寄せていた。-----中略----- そうした先生たちの仕事を斎藤先生は楽しそうに眺めていて、自身は一言も発言なさらなかった。」¹²⁾と回想している。

その他にもいくつかの点で、斎藤は東小のしきたりを変えている。彼の著書、「可能性に生きる」によれば、長年続けてきた新年の式を、村の有力者たちの強い反対を押し切って中止させ、実質村民運動会だったものを学校行事としての運動会に変え、村の文化祭だったものを学校主導の音楽会に変えている。このようにそれまで学校教育に大きな影響力を行使してきた村の有力者やPTA役員の意のままにならない斎藤の動きが怒りを買ひ、他の要因が加わって、1年で転出という異例の人事になったと斎藤は推論している¹³⁾。著者はその他に、地区の教育事務所長が歓送迎会で斎藤に言った言葉、「東小でまた島小のように多くの参観者を集めるのではないかとみんなが心配していた

が、それがなかったのでみんなが安心した」¹⁴⁾が物語るように、地区の教育行政責任者自身が、抜群の成果を遺した斎藤を安心して境町の中心校に据えたと筆者は推理している。

ところで斎藤を迎えた教師たちにとって、彼と過ごした1年ほどのような1年であったのだろうか。確かに成績のつけ方のABCすら知らず、斎藤に厳しく注意されてヒステリックに怒った教師もいた。しかし多数の教師は、武田が指摘するように¹⁵⁾、斎藤を校長として尊敬し従ったように思われる。

前掲の「可能性に生きる」(P.420～P.421)によれば、転勤の内示を受けた教頭は、もう1年斎藤と一緒に勉強したいと異動を承知しなかったが、斎藤が自分も転勤することを彼に打ち明け諦めさせたことと斎藤は書いている。転出の知らせを聞いて涙を流した女教師もいた。高名な彼が、大方の教師たちの予想に反して殺到する外来者を断わり、島小の実践を重荷に感じていた教師たちに安心感を与えたことは間違いなかろう。前任者の方針を踏襲し、学内の雰囲気落ち着かせ、厳しかった授業指導もほどほどにして教師たちを伸び伸びと教育活動をさせたことが良かったようである。武田の観察(前掲)を読んでもその様子うかがえる。その反面、要所で彼の卓越した指導技術を小出しにして、授業や行事で教師たちに範を示し学校の教育レベルを上げている。彼ほどの指導力があれば、五～六分の力で教師を指導した方が、普通の教師たちには良い結果をもたらすことも考えられる。島小時代のように斎藤が全力投球すれば、萎縮するか、疲れ果てて脱落する教師の続出もありうる。東小時代の斎藤は、島小時代に比べ気負いと緊張感が減っている。彼にとっては物足りなかったかもしれないが、武田が指摘したように次の仕事を前にして癒しを兼ねた1年になったことは確かである。いつまでも短距離走を続けていては、斎藤といえども疲労困憊し倒れてしまうだろうから。

最後に彼の言葉を引用して、東小学校での短い1年を締めくくりたい。「とにかく私は東小から移されたのだった。せめてもう1年やっていたら、すばらしい学校になったのにとすると残念だった。しかし1年だけだったが、島小での質の高い実践が、一般化し、他の学校でもいくらでもできるということを実証したことは一つの喜びだった。また島小以外の先生たちが、教育という仕事は大へんなことができるのだということを経験してくれたことも大きな収穫だった。私は島小にだけ11年もいたので、他の学校の先生たちは、島小の仕事を特別なものと思っていたからだ。」¹⁶⁾ そうはいうものの、斎藤の心の中には、境小のような大規模校で自分の最後の仕事をしたい、小さい島小だからできたという噂をばらまく輩を見返したいという願望があったようだ。だからこそこの異例の人事をあっさり呑んだとも考えられる。

3. 境小学校長の時期(1964～1969)

(1) 斎藤赴任当時の境小の実態1—文献による斎藤自身の回想

彼が全集12巻「可能性に生きる」P.426～P.433で述べていることを要約するとおおよ次のようになる。

境小学校は境町の中心にあり、斎藤が赴任した 1964 年（昭和 39 年）4 月には、児童数 952 人、職員数 30 人、普通学級 23 クラスと特殊学級 2 クラスからなる町一番の大規模校であった。子供たちはほとんど町の子であった。4 月 8 日の始業式はひどくうるさかった。話などできたものではない。新任の校長や教頭に対する興味も関心もない。他人に対する集中力がないのである。先生たちが拡声器の音をどんどん大きくしても効果はない。また学校全体がひどく不潔で乱雑、授業が始まっても騒がしく、授業中なのか休み時間なのか区別がつかない状態だった。赴任してからも 5 人の男子教師は麻雀をしていたらしく、朝になると宿直室にはウイスキーの空瓶だの、どんぶりだの、煙草の空箱などが乱雑にごろごろしていた。先生たちは目を赤くして眠そうに授業に出て行ったり、中には授業が始まっても宿直室でごろ寝しているものもいた。

体操の時間はほとんどドッジボールと野球だけで、跳箱など少しもしなかった。斎藤が跳箱はすべきだと言うと、町の子で腕の力がないから跳箱は飛べないという返事が返ってきた。また前任校長は県内でも音楽校長といわれていたにもかかわらず、音楽で二部合唱すらできなかった。

この学校には立派なプールもあった。しかし校長以下教師たちは「夏休みも監督しなければならぬ大変だ、プールなどないほうがよい」と言っていた。斎藤が赴任した夏、子どもたちは浮袋を使って水遊び、教師たちはプールの周りで日傘をさし時間まで監督しているだけであった。

最後に、この学校の先生たちは、根は真面目だが斎藤のように厳しい実践をしてきた校長が来ることを一般的には恐れるとともに喜ばない教師が少なくなかった。このような雰囲気は、斎藤を短歌を通して以前から知っていた養護教諭田中せつが「斎藤先生が境小へ来られるということがわかると学校の表情は大そう複雑でした。私は私で日頃伺っている先生の厳しいお仕事の中味に連なってゆけるだろうかという心配もないわけでもありませんでした。」¹⁷⁾と書いていることから推察できる。さらに何人かの教師は赴任反対運動を試みたり、また斎藤校長は小規模校ばかり歩いてきたから、こんな大きな学校に来ればどうしてよいか困ってしまうだろうとも言っていた。しかし斎藤は PTA や職員にはっきりと「島小はあまりにも小さすぎた。しかも分校と本校に別れていた。一方境小は児童数が多く全員が一か所にいるから、学校の機能、子供の力を十分に発揮させることができる」と宣言している。

ともかく赴任当時の斎藤の観察はまことに手厳しいものであった。ともあれろくな実践をしていない教師たち、校内で不安と中傷が渦巻き失敗を期待する教師もいる中で、斎藤の校長生活最後の 5 年間は始まった。

そこで、このような斎藤の観察を、続く「実態 2 — 当時の境小教師たちの回想」と比べてその信憑性を吟味することにする。

（2）赴任当時の境小の実態 2 — 文献による境小教師たちの回想から

①若井幸江の回想、『前年度までの境小は、職員一人一人が自分の学級の仕事を自分で考えてするという状態で、学校としてのまとまりは、ほとんどみられませんでした。』¹⁸⁾

- ②青山園江の回想、『斎藤先生が赴任された当時の境小は、どこの学校とも変わらないむしろ大きいだけにまとまりがない学校だった。自分が傷つくことを恐れ、授業研究などできるだけ避けてとおり、その中で自分たちの力をお互いに過信しているような職員集団だった。』¹⁹⁾
- ③高橋元彦（斎藤から学んだ手法を校内、県内だけでなく全国の学校に伝えた）の回想、『斎藤先生が来られる前は、仕事という仕事は何一つしていませんでした。放課後はマージャンとか野球に明け暮れていたのです。』²⁰⁾
- ④-1 柴田みね子（岸みね子）の回想、『斎藤先生が境小学校に来られた頃は、職員室の机の上が、本やノートの山だった。そして時には組合のチラシなどが、床の上に落ちていたこともあり、当然のこのように、気にする人もいなかった。』²¹⁾
- ④-2 柴田みね子『ごく近くの中学の先生でも、斎藤天皇と言ってこわがっている先生が境小に来られたのだった。大きな石がごろごろ校庭にある。校舎も荒れている。「あの斎藤先生がまず何をなさるのだろう。」と職員もびくびくしながら、じっと息をこらしていた。校長先生が職員室の西の入口から入って来られると、職員室にいる先生たちは、黙ってじりじりと東の出口から出ていってしまう。こわいからだった。』²²⁾
- ⑤田中せつ（養護教諭）の回想、『私は保健室のそばの階段をドタドタと駆け降り走り去る子供の足音がなかなか絶えないので注意をしに行こうとした矢先に、「あんな歩き方をしたら膝を痛めてしまう。あなたは養護教諭なのに、毎日あんな歩き方をしているのをどうして平気で見ているんです。子どもをこわしているのがわかりませんか。」と指摘され、斎藤先生のこのような感じ方から教育の仕事の本筋を気づかされた。』（一部修正一注0）参照²³⁾。
- ⑥高屋敏江の回想、『特殊学級で担任した11人の子どもたちは、授業中気がつくつと便所に行ったり、水飲み場で遊んだりしています。授業が始まっても自分の席にはつかないでいます。教室内は騒音で落ち着かない毎日が続きました。毎日考えても、何一ついい知恵は浮かばず、気持ばかりあせる日々を過ごしていました。』（一部修正）²⁴⁾
- ⑦教師たちの回想に対する筆者の吟味:新任の斎藤校長の下で汗を流した6人の教師たちの回想は、(1) 斎藤の回想とほぼ一致し、さらに斎藤が言及していない課題まで具体的に触れている。斎藤就任以前の境小は、おおむねこのような、即ち自覚と力量が足りない教師による教師のための学校、子どもたちが被害者の学校であったと考えられる。次に(2)で斎藤がどのようにして学校を変えたか、本人と教師たちの回想で辿ってみる。

(3) 斎藤喜博の手法と成果 1 一文献による斎藤自身の回想

斎藤は、まず境小で自分自身の教師生活最後の仕事をしようとして決心している。その中身は東小の時と同様、島小とちがうものを創り出す、つまり島小でやったことを、そのままくりかえすまいと考え、原則として参観もことわった（武田常夫など例外ある。また赴任2年目以降小集団の参観者が時々見えたと言った卒業生が話していた）。ただ参観希望者も多く、一部分でも見てもらうことも後のた

めに必要だと考え、後には体育祭と音楽会と卒業式だけを一部のの人に公開した。また最後の年度である昭和 43 年 12 月の音楽会は、全国の約 500 人の人たちに公開した。川島カメラマンにも昭和 40 年 10 月の体育祭のときから撮影をはじめてもらった²⁵⁾。

次に斎藤がいかにして境小を一新させたか、彼の著書「可能性に生きる」を中心にそれ以外の文献を適宜加えて見てみよう。

まず 4 月の第 1 回職員会では、基本的な考え方として、①学校の存在理由—知能や情操を高める場所 ②実現手段として、子ども、クラス、学校全体、教師同士の交流が不可欠 ③良い授業には、教師の豊かな人間の力と優れた教授法が必要。そのためには全員で学習、教材研究、教授法研究をする必要があると述べている。ついで具体論に移り、④学校全体の環境をもっと清潔にして子どもをすっきりさせる ⑤授業が始まったら教師は直ぐ教室へ行き集中した授業をする ⑥学校でマージャンはしない、などを伝えた（以上要旨）。

また彼は赴任と同時に廊下を歩き、教室に入って授業を見た。最初の頃は、「校長が廊下を通ったり、教室に入ってくるので大変だ」という教師もいたが、学校の空気は一変していった。授業時間になると学校全体がシーンとなった。マイクも 1 学期のうちに使わなくなった。校庭で全校集会をする時でも、マイクを使用しないで千人近い全校生徒はシーンと聞くようになった。赴任した翌年の卒業式でも、マイクは使わないのに、斎藤や来賓の話、在校生や卒業生の言葉も、大きな講堂のすみずみまでよくとおっていた。マージャン教師も何か月もたたないうちに実践に熱中しマージャンをやめてしまった。初めのうちは教師たちが跳箱・マット体操の指導ができないので、斎藤が指導して見せ、生徒たちが跳べるようになった学級が多かった。この間の経緯は、当時既に 5 年間境小の体育主任だった高橋元彦が驚嘆と反省を込めて回想している（後出）。町の子には無理だという教師たちの言い訳は通用しなくなったのである。また教師たちが諦めていた二部合唱も、斎藤が自ら指揮して見せ、二部合唱どころか三部、四部、そして最後は五部合唱までできるようになった。これも大規模校だからできたことであり、斎藤が大規模校では困るだろうという風評を一掃した。また教え方次第で子どもはできるようになることを教師たちに身をもって示したのである。

また厄介者扱いされていたプールを増改修し、2 年目から 4 年生以上は 25 メートル以上の泳力を目標にし、浮袋は禁止して基礎から指導した結果、目標達成はもちろんのこと、県内の水泳大会で最右翼の学校に登りつめたのである。（以上前掲「可能性に生きる」P426-P437 による）

一方で「斎藤校長は、政治的手腕はない」という島小時代の批判に対する反発もあり、施設設備の充実にも力を注いだ。石ころだらけの校庭の整備²⁶⁾、頻繁に断水する給水設備の改善、プールの大改造、グランドピアノの購入など、PTA の協力²⁷⁾ も得て次々に実現させた。大規模校では教師定員に余裕があり、校長が動きやすかったからでもある。

こうして学校が変わっていくことを知った教師と生徒たちは、仕事や学習に張り合いを持って生き生きと活動するようになった。また保護者は、大筋で学校を信頼するようになった。これも学校が集団となり、学校が機能を発揮し、指導の方法を工夫することにより実現したことである。

ではこのような斎藤の総括を、教師たちはどのように回想したであろうか。次に見てみよう。

(4) 斎藤の手法と成果2—文献による境小教師たちの回想

- ①青山園江の回想、『斎藤先生は、消極的だった職員集団を、少しずつ少しずつ決して無理をなさらずに、それでいて着々とご自分の考える方向に向けて学校をつくりかえてゆかれたのだった。』²⁸⁾
----- (中略) ----- 『境小の仕事は1年1年、きちんと積みあがっていたから学年の間にははっきりと階段がつくられていた。だから子どもたちは、上級生の歌やとび箱や行進や水泳をみて、自分も早くあんなふうになりたいといつもあこがれをもっていた。その思いが4月になって新しい学年になると堰をきったように出てくるのだった。「先生天地創造の歌は歌わせてくれるの。」子どもたちは待ちきれないといった表情をしめすのだった。』²⁹⁾ 『斎藤先生は、教師たちにいつも具体的に教えて下さったのです。時には職員会議の机が、跳箱になったこともありました。ご自分が退職される5年先のことまで見通しながら-----。』(一部修正)³⁰⁾
- ②若井幸江の回想、『はじめての体操会が終わって反省会がありました。そのとき校長先生が、「みなさんは、なぜ、子どもたちにトレパンをはかせたのですか。子どもたちのあの美しいしなやかな足がみえないようになぜしているのですか。あれでは美しい身体の動きをむりにだめにしているのですよ。子どもたちは自由に動けませんよ」ということを話されました。それまでの私たちは、子どもの体の動きの美しさなど少しも考えないで、体育ならトレパンをはかせてすればよいと、今で思えば形式的なことをしていたわけでした。』³¹⁾
- ③大橋武雄の回想、『斎藤先生が、合唱の指導や、跳箱の指導をするときなど、いつも実際に子どもが動いているときに指導されることが多かった。的確な身振りと言葉をかけて、ひびきのあるよい合唱やよい助走をつくりあげていった。こうして事実を見せながら、「初めと終りにいくら説教してもだめですよ。子どもが現実に動いているときに声をかけてやらなければ子どもは少しもよくなりませんよ。」と教えられた。』(一部中略)³²⁾
- ④高屋敏枝の回想、『初めて特殊学級の担任になり困り果てていた私の教室に見えた斎藤先生は「子どもたちには大きな愛情とともに、きびしさが大切なのです。社会人になれば生活していくのは、大変なのですからね」と将来を見通した言葉でした。私も日が経つにつれきびしさが必要であることがわかってきました。家族の過保護でわがままが目立つ子、いたずらをして人を驚かせたり困らせることに興味を持つ子、欲張りで粘土や積み木を一人占めする子などが目につくようになり、私はその場ですぐ注意をするようにしました。自分で悪いことをしたときはわかるらしく叱っても不思議に反抗はしませんでした。

また子どもたちは紙屑を教室や廊下に散らかす習慣がありました。校長先生は子どもたちの目の前で自分で紙屑を拾われ、決して拾うようにとは、言われないのです。しかし子どもたちはいつのまにか紙屑を拾うことをおぼえました。そして教室らしくなったのは、4月担任以来1月も経ってからのことでした。こうして雑巾を持って遊んでいた子どもたちまで、よろこんでふくよ

うになりました。』(一部修正)³³⁾

⑤柴田みね子(岸みね子)の回想、『夏の暑い日、子どもたちと一緒に校庭で草むしりしたり、また跳箱指導で汗びっしょりかいて職員室へ入っていく私たちを待ち受けるかのように、斎藤先生は「どの茶碗だったかしらね。」と言いながら先生たちにお茶を入れて下さるのだった。』……(中略)……『また斎藤先生が赴任された当時汚かった職員室を見て、「床のチラシは直ぐ頭に入るのだから読んだらすぐ始末した方がいいですよ。図書か保健の先生以外は、何も置かないようにしましょう」と言われた。また「男のトイレに煙草のすいがらをすてるのはだれかね、ここの先生たちだよ。」そのたびに先生たちは首をすくめるのだった。うるさいほど細かく注意されたが、その効果は抜群、2、3か月たつと著しく改善された。整理整頓にこだわる理由を先生たちに向かって、「職員室の机の上に何も置かないのは、授業で子どもたちとやりとりし疲れた頭を休ませるために、職員室をすっきりさせておくことだ」とも言われた。』(一部修正)³⁴⁾

⑥青山園江の回想—追加、『斎藤先生は、退職まで5年しかなければならないように、その中で島小の10年間とは別の色合いをもった境小をつくりあげてしまわれたのでした。境小1年目の仕事の中で5年後のあの子どもたちの姿を誰が予想できたでしょうか。職員会議や研究会の場で先生はいつも具体を示され、それについて職員の意見を求められましたが、どんなに立派な発言もそれが事実と関係なく語られる時、先生は容赦なくそれを否定され事実立ち向かう教師を育てようとかかなりエネルギーに会議を進行されたのでした。「固着している、概念的だ、優等生は駄目だね、形式的だ」、先生の口をついて出る否定の言葉のどれもが、みんな自分にあてはまるものばかりに思えるのでした。』(一部修正)³⁵⁾

⑦大槻志津江(境東小学校で斎藤の指導を受け、3年後境小へ転勤。その後全国各地の教育現場で斎藤の手法を指導)の回想、『斎藤先生が教師に向かって、なぜあのように激昂されたり嘆かれた意味が、年経るごとにわかるような気がしてならない。

見えてよい筈の事実を見落とし見過ごしてしまう教師の鈍感さ感性の貧困さへの怒りであると共に、教師の力量そのもの以上に、教師の技術の根底をなす教師の人間性に対して問い詰めずにはいられない激しい憤りを感じておられたようだった。……(中略)……斎藤先生は「味付け」といわれて各クラスに入れ、授業や表現活動の指導をしてくださった。それは、無力な教師の汗をご自分の汗に変えられて子どもに向かわれ、目の前の子どもたちを、体全体で誉められてから、ひとつひとつ厳しい要求を具体的に出され、子どもの心をゆさぶりながら、あつと言う間に道づれにしまわれ、ここぞというときに斬新な世界へととび移らせてしまうという「味付け」であった。頬を紅潮させ湧きたつ子どもの喜びを、全身に受けとめられた斎藤先生の額からは、汗がとめどなく流れ、投げかける凝縮された言葉、身振りには、名優がドラマの世界を演じきっているかのような感動的な場面が目にかぶ。こうした「味付け」によって力を引き出された子どもたちは、あたかも自分自身で上りつめたかのような快感と充足感にふくらみ、次の新鮮な世界に向かって意欲をかきたてながら、常に主役を演じきろうとした積極的でたくましい子どもた

ちであった。』³⁶⁾

- ⑧-1 高橋元彦の回想、『斎藤先生が境小にこられて2か月たった6月のこと、体育の時間に開脚腕立て跳び越しをすることにした。約40名中跳べたのは2名だった。それを見ていた斎藤校長が「半分の子どもを、私が指導してみましよう」といわれ、驚いた顔をしている子どもたちの指導を始められた。斎藤校長は跳箱のすぐ横に立って、何かをいって跳ばせていた。ところが10分もたたないうちに「こちらは全員跳べましたよ」といわれた。子どもたちは、跳ぶ前と違って嬉しそうな子や驚いた顔が私を見ていた。私の方で跳べた子は相変わらず最初に腕力で跳んだ2名だった。斎藤校長が、文学や短歌だけでなく体育の指導まで出来るとは驚きであった。

さらに驚いたことは、校長さんの指導で跳べるようになった3人の生徒が「先生、放課後跳箱の練習をしてもいいですか」というのである。私が境小で5年間体育主任をしていて初めて聞いた言葉であった。2日おいて、同じ授業をやったとき、校長さんに教えていただいた子どもたちだけでなく、私の方において跳べなかった子どもたちも、すました顔をして跳んでいる。跳べるようになった子が、跳べなかった子に教えて跳べるようにしたのである。私には斎藤校長の不思議なまでに子どもを変えてしまうその技を知りたいと思い、斎藤校長の著書を読むことを手始めに、私の授業探求が始まった。(一部省略と修正)³⁷⁾

- ⑧-2 高橋元彦の回想、「月曜日の朝礼で行進を指導をしていた私は、今朝も指揮台の上にあがって初めの歩き出しと、終わりの合図の笛を吹いただけで終わってしまった。校長さんは『なんの指揮もできない指揮者は必要ありませんね』といわれた。今の子どもに何を指導すればよいのかまったくわからず、ただ人形のように朝礼台に上がって立っているだけであった。校長さんが子どもを指導されるとき言葉をメモし使ってみたら、『高橋さんはどこに目をつけているのですか』といわれてしまった。私はますます自信をなくしていった。日曜日の夜は、明日のことを考えると、寝付けなくて困った。そのうちに私は、人の真似でなく、どんな小さなことでも自分にわかったことだけを言うように心がけようと思うようになったら、校長さんが後ろから教えてくれ、そのように注意すると子どもたちの歩き方や表情が一変、美しく豊かに歩くようになったのである。こういうことを何度も繰り返しているうちに、子どもたちに自分の言葉が通じるようになり、日曜の夜も、明日の計画が立てられるようになってきた。」(一部省略と修正)³⁸⁾

- ⑨岡芹忍(島小から1967年に転任)の回想、『私が境小学校に転任した昭和42年の秋の体育祭(運動会)で、木村二郎さんが作った「風と川と子どもの歌」という音楽舞踏劇を始めてやることになった。-----中略-----同じことを二度くりかえさないという斎藤先生の強い考えが「音楽舞踏劇」という新しいものを生み出してきたのだと思った。』(一部修正)³⁹⁾

- ⑩武田常夫の回想、『私が東小2年目のとき、斎藤先生は境小で2年目を迎え、驚くべき変わりようを見せていた。それを私は、運動会や音楽会などの行事を通じてまざまざと見せつけられていたのである。それが「島小で到達した理論や実践をもとにした」仕事であることを、また島小の繰り返しではなく、「島小の到達した高さからこの実践を始めよう」との決意につらぬかれた仕

事であることを、私は了解したのである。……（中略）…… 斎藤先生より 2 年遅れて境小の職員になった私が最初に驚いたことは、ここの先生たちがあきれほどきびきびとよく動き、仕事にいささかの無駄のないことであった。それでいて、ここの先生たちはいつも明るく、それは、とてもあの 2 年間の実践の修羅場をくぐりぬけた人たちとは思えない素直さをもっていた。……（中略）…… しかし私は、そのときそうした先生たちの行為すべてに納得し共感していたわけではない。たとえば、ここの先生たちが、業者が持ち込んでくる市販のワークブックなどを安易に生徒に与えたり、音楽や体育などをいかにも形式的な回数繰り返して子どもたちに教えようとしている面もいくつか見受けられたのである。』（一部修正）⁴⁰⁾

①教師の回想に対する筆者の吟味

全体を通じて目立っているのは、斎藤の並はずれた授業指導力、教師指導力である。これぞプロフェッショナルといえる超一流の技、子どもの成長を大切にできる心、高いモラル、強力なリーダーシップを備えた校長像が回想から読み取れる。斎藤の欠点、学校のリーダーとしての問題点の描写が武田の鋭い指摘を除いて全くと言ってよいほどないのがやや気になるが、これについては、まとめの最後で資料と私見を付け足すことにする。

（5）聴き取りによる保護者の回想⁴¹⁾

今年 91 歳になる須永久夫氏は、斎藤が境小に赴任した年から 3 年間同校の PTA 会長を務めた。現在家業はご子息に任せ、ご自分で自動車を運転して群馬県内の温泉宿などに土産品を納入する仕事をされている。休日には絵を描きゴルフ場へ足を運ぶ。絵画は個展を開くほどの腕前である。

須永氏との出会いは、斎藤にとって大変幸運だったように思う。境小時代須永会長以下 PTA 幹部が斎藤を支え続け、島小や東小のような対立が、斎藤と保護者や町の有力者との間で表立って起きなかったからである。PTA 地区懇談会などで、自己主張を曲げない斎藤が父母と激しい議論になりかけたとき、中に入って円満に収めたことがあったと須永氏は述懐している。

須永氏が斎藤を支えた背景はいくつか考えられる。彼は筆者と初めて話をしたとき、開口一番「わたしは斎藤校長を教育者として尊敬している。教えられることが多かった。彼は好奇心が強い人で、学校職員を幅広くするための研修にも積極的であった」と話してくれた。須永氏と斎藤との相性が良かったことは確かだが、斎藤自身も校長として島小時代より少しは練れてきたこともあろう。参観者やマスコミの来校を原則として断ったことも良かった。しかしそれ以外に町の中心と純農村という立地条件と時期の違いも影響したと私は推測している。

境町は例幣使街道⁴²⁾の宿場町として栄えた古い町で、住民の多くは当時商業と繊維工業に関係した仕事に従事し活気があった。したがって伝統的な農村住民より世間が広く進取的である。東武伊勢崎線の境町駅は、東京と町を結ぶ玄関口にあたり、そこを通じて人・物・情報の出入りが盛んであった。斎藤の独創的な教育や考え方や改革に対しても、先入観による拒否反応がない条件が整っていたと、須永氏や元境小教師たちの話から伺える。

須永氏の他に、副会長だった大澤和世氏と現在の境小校長の新井弘氏からも同日聴き取りをした。その結果も含めて筆者なりにまとめると、①齋藤に対する表立った追い出し運動、反対運動は起こらなかった。②島小と異なり、地元出身の地方議員や町のボスたちの目立った蠢動もなかった。③齋藤の学校づくりを評価する父母も多かったし、支援体制も確立していた。④但し体育、音楽、表現活動に学習内容が偏っていると心配、批判する父母も相当数いた。⑤体育祭に従来のようなレクリエーション種目がなくなったことへの不満・郷愁を抱く父母もいた。⑥したがって齋藤は小中高一貫校校長が適任ではないかという意見も父母の中にあつたと聞いた。⑦日教組指令によるスト参加は、島小時代同様続いていたし、齋藤も組合員であり続けたが、それを PTA として取り上げて問題視することはなかった。⑧島小時代のような女性にまつわる風聞はなかった。この点については、齋藤自身も 50 代になっていたことと、境小の女教師たちも全員 30 代以上で家庭を持っていたことが影響したように思われる。⑨齋藤の学校経営を支援する PTA 幹部の統率力が強く、④、⑤、⑦のような不満があっても抑え込むことができた。⑩齋藤自身の学校経営方針転換により学内が落ち着き、嫉妬の芽が育ちにくくなった。-----のようになる。

(6) 聴き取りによる卒業生の回想⁴³⁾

齋藤校長時代に境小の 4, 5, 6 年生として学校生活を送った今井登貴江、大澤亮湛の両氏（現在 55 歳で、お二人とも地域に貢献する仕事に従事）から聴き取った内容を紹介すると、まず異口同音に「学校ががらりと変わった。なかでも特に音楽と体育の印象が強烈で、ベートーベン作曲第九交響曲の歓喜の歌は、入学式、卒業式で歌ったし今でも歌うことができる。他の歌ともども今でも歌うことがある。実は大澤亮湛氏のご両親の間でも、父はもっと国語、算数に力を入れるべきだという考えであったが、羽仁もと子に賛同する母（PTA 副会長）は音楽・体育重視の方針に賛成で、両親の間で議論があつたとのこと。恐らく保護者全体でも意見が割れていたと思われる。運動会からレク種目が一扫されたことを若干寂しがる子どもと保護者もいた。毎月のように行事があつたことも印象に残っている。春は体操の会、跳び箱や器械体操をした。6 月からは水泳、卒業時には全員が泳げるようになった。秋の音楽会、サッカー大会、冬の卓球大会も記憶に残っている。発表会の前は、毎週かなりの時間を割いて歌や体育の練習をした。道徳の時間は歌の練習時間になった。また当時サッカーをする中学は近隣に一校しかなく、太田市、伊勢崎市などへ遠征した。このように活発な活動の中で教師の間に上手な生徒、できる生徒を重視するエコひいきを感じたこともある。齋藤校長の全校集会での話の中には、「朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり」のように今でも覚えているものがある。外部からの見学者も 5 年生になったころから 10 人前後時々見えていた。

またこの部分は聞き取りではないが、同学年で現在北海道新聞論説委員をしている卒業生木村仁氏が、2009 年 5 月 25 日付の同紙上に、「キハク校長」の授業と題して齋藤の実践を回想している。彼はその中で 4 年か 5 年のときにキハク校長から直接受けた忘れられない授業を回顧し、室生犀星の詩に同級生が答えた解釈を聞いて衝撃を受けたと述べている。

4. 筆者のまとめ

これまで見てきたことからわかるように、東小、境小で斎藤が取った学校経営方針は、島小時代と大きく異なり、外部からの参観と取材を大幅に制限した。その結果不安と緊張の中で斎藤を迎えた教師たちは、ひとまず落ち着いた。また斎藤自身も、校内での実践に島小時代よりはるかに長い時間を割くことが可能になり（島小のように本校と分校に分かれていなかったことも幸いした）、すでに 53 歳になった斎藤の身体的・精神的負担を軽くした。そして生み出された時間的、精神的余裕を、生徒と教師の直接指導に割り、教師たちの回想にもあるように学校改革を加速させた。

また斎藤は島小のように話題にのぼる目立つ手法は取っていない。5 名の元境小教師の聴き取りによれば、島小時代のように「斎藤さん」と呼ばせていないし、職員会議や PTA 会の最後で、合唱やスポーツをしていない。遅刻・欠勤・早退に寛大な姿勢を示していない。この点では普通の学校に準じている。

このような方針の大転換を斎藤にさせた要因として、筆者は、斎藤がすでに教育界のスーパースターの地位を確立し、これ以上彼自身を広報する必要がなくなり、また 11 年の厳しい実践に疲労と倦怠を感じ、異なった実践を試みたいという気持ちになったのではないかと考えた次第である。

境小に赴任した斎藤にとって島小との大きな違いの一つは、教師の学歴と年齢であった。島小では若い 1 名の女教師を除き師範学校以上の学歴をもった教師はいなかった。しかし境小の教師のそれは島小より高く、群馬大教育学部と群馬師範出身者が多数を占めていた。年齢も 30 代が多く、20 代は全教師 30 名中わずか 2 名だったという。したがって島小ほど教師に手間はかからないが、その代わり自尊心はより強く、自分の先入観に固執しがちになる。そこで斎藤自身が範を示して教師たちを心服させ、次々に新しい目標を提示し、褒めるだけでなくしばしば厳しく指導し、自信と喜びだけでなく緊張感を持たせることにより、島小とは一味違った学校づくりを 5 年間で達成したのである。

集団で聴き取りをした 5 名の境小の元教師たちも⁴⁴⁾、斎藤は教師たちの意見を聴くという点では民主的で、強制された覚えはないとのこと。しかし斎藤に言われると納得し従わざるをえない気持ちになってしまう。叱るとき怒鳴りはしないが睨まれると眼が怖い。そして学校が変わっていったと述べている。また後日単独で聴き取りをした高橋元彦は、生徒ともども呼吸法と発声法を教えてもらい、体育や団体行動指導が以前とは見違えるようにスムーズにできるようになったと回想している。さらに元教師の一人青山園江は、「斎藤先生が境小にお見えになった年が私の教師元年です」と電話で打ち明けてくれた。まさに校長のリーダーシップのお手本、斎藤マジックと名付けてもよい。私など校長経験者としてとても敵わないと実感した。しかも教師だけでなく生徒たちも斎藤マジックで変わっていった様子は、高橋元彦⁴⁵⁾をはじめ多くの教師の回想からも読み取れる。

ところで斎藤に遅れること 2 年、やっと境小に転勤してきた武田常夫が果たした役割はまことに大きなものがあつたようである。この事実も多くの教師の回想から読み取れるし、聴き取りをした

6名の元境小教師たちも異口同音に武田に助けられたと感謝していた。彼は非常に人望がある人だと感じた。もう一人、斎藤の著書または編著で言及されていないが、当時の中島教頭（2008年逝去）が縁の下の力持ちとして学校内の雑事を見事に処理し、斎藤と教師たちを支えたと聴き取りをした教師たちから聞かされた。赴任も退職も斎藤と同年で、校長時代に彼が助けてもらったこの教頭について、斎藤が境小関連の著書の中で全く触れていないことに筆者はいささか違和感を覚えた。

このように見てくると、たまたまの1年になった東小は別として、境小5年間の斎藤の学校経営は、島小より安定していたと筆者は判断している。教師のモラルと力量を大幅に高めたし、生徒の心身も大きく成長させた。地元との軋轢も取り立ててなく、大規模校でありながら島小ではできなかった成果をあげた。校長としても、島小時代と比べると問題点がずっと少ないように感じる。島小より資料ははるかに少ないが、境小での斎藤の実践を、現在でも校長はもとより意欲と好奇心がある教育関係者が学ぶことを望むものである。

最後に、ここまで論じてきた境小における斎藤の校長像の信憑性について一言付け加える。入手できる少ない資料を基に論じる以上、誤りはありうると自覚しているが、取りあえずひとつ気になったことは、元境小の教師15名が回想している「授業は教師がつくる」の中で男女比は3:12、また「教師が教師になるとき」では3:6といずれも女性がかかなり多い。他方斎藤在職当時の男女比はおおよそ4:6と聞いているから、執筆している斎藤教室の優等生たちは、女性が主力を構成していたようである。そして斎藤が編者のためもあってか彼の称賛に終始している。「事実と創造」掲載の論文などを読んでみても斎藤にとって望ましい情報が並んでおり、批判らしい批判は見当たらない。聴き取りでも大差がない（注45参照）。確かに斎藤はスーパー校長であった。ただ人間である以上欠点もある。全教師が心服することはありえない。だからこそ筆者が島小時代の斎藤の校長像を論じたとき、あえて彼の影の部分も書き、その上で、トータルとしての斎藤を高く評価した。筆者は、斎藤はこのような欠点もあったが、全体として見ると貴重な遺産を残したというシナリオでないと納得できない性分なのである。斎藤が赴任したときマージャンにうつつを抜かしていたあと4名の回想（残り1名は執筆者の高橋元彦）を読みたかった気がするが、彼らは全員斎藤の方針に合わず、境小を去ったと高橋元彦が話してくれた。退職後の斎藤の活動を調べるため、これからも境町、玉村町、島村方面にも行くので、隠れた資料と新しい出会いも縁があれば求めたいと思っている。

5. おわりに

1969年58歳で境小校長を最後に公立学校を定年退職した斎藤は、1981年70歳で病没するまで、教授学の確立に尽力するとともに、佐賀大学（講師）、宮城教育大学（講師・教授）、岡山大学（講師）、都留文科大学（講師）などで教えながら旺盛な執筆活動を続け、その上全国の教育現場に招かれて授業指導と講演を行い、さらに毎月第三日曜日に、自宅を開放して教育関係者の指導をすると

いう超過密な日々を送っている。彼の人生は最後まで全力疾走だった。晩年の仕事と生き方もまた記録に値すると筆者は高く評価しているが、今回は紙面の制限もある。公立学校退職後の斎藤の報告は次回に譲ることとする。

注

- 0) この部分を表現している文章は、限られた紙面にできるだけ多くの回想を載せるため詳しく長すぎる文章は、文意を損なわない範囲で短縮したり、形容詞、副詞などの省略を行った。以下に出てくる「一部修正」、「部分修正」も同様の意味である。詳しくは原文を当たって頂きたい。
- 1) 「斎藤喜博全集 12 巻 可能性に生きる」P383 国土社 1971
- 2) 「斎藤喜博全集 11 巻 島小物語」P614 国土社 1970
- 3) 同上 P616～621
- 4) 1929 年群馬県生まれ。群馬師範卒業後、境小、島小、境東小、境小を経て群馬県指導主事に転出。その後赤堀中学校長、花輪小学校長を経て 1983 年病気退職、1986 年境町で死去。著書に「文学の授業」明治図書 1964、「文学の授業でなにを教えるのか」明治図書 1966、「私の作家論」明治図書 1969、「真の授業者をめざして」国土社 1971、「詩の授業」明治図書 1971、「イメージを育てる文学の授業」明治図書 1973、「授業の発見」一荃書房 1976、「授業者としての成長」明治図書 1977、「授業の中の子ども」明治図書 1980、「文学と人生」1983、「授業に自信がありますか」明治図書 1986、「斎藤喜博抄」筑摩書房 1989、がある。斎藤の後継者として期待されながら、1983 年校長在任中に発病し退職、1986 年師走多くの人々に惜しまれながら他界した。まだ 57 歳だった。武田は斎藤の著作「続童子抄」（第一期全集 2 巻）P386 の文と島小で開かれた研究会に参加したとき斎藤の仕事に感動し（武田常夫著「真の授業者をめざして」P10～11 国土社 1990 他）1954 年島小へ転勤した。以後島小、境東小、境小で多くの教師から指導者として頼りにされた。境小の教師たちの回想の中で、武田の指導力に教えられ助けられたことが、何人もの教師から回想されている。
- 5) 斎藤喜博編「教師が教師になるとき」P145～146 国土社 1972
- 6) 前掲 4)、後出 45) 他参照
- 7) 武田常夫「斎藤喜博抄」P113～114 筑摩書房 1989
- 8) 前掲「斎藤喜博全集 12 巻 可能性に生きる」P407
- 9) 同上 15-2 巻 P244
- 10) 同上 P399～402
- 11) 前掲「斎藤喜博全集 12 巻 可能性に生きる」P408
- 12) 前掲「斎藤喜博抄」P114
- 13) 「斎藤喜博全集 12 巻 可能性に生きる」P421～423
- 14) 同上 P423
- 15) 前掲「斎藤喜博抄」P113
- 16) 前掲「斎藤喜博全集 12 巻 可能性に生きる」P424～425
- 17) 斎藤喜博編「教師が教師になるとき」P105 国土社 1972
- 18) 斎藤喜博編「授業は教師がつくる」一荃書房 P48 1975
- 19) 同上 青山園江 P33
- 20) 同上 高橋元彦 P89
- 21) 「境小こぼれ話 (2)」柴田みね子—事実からの出発 P34<事実と創造>86 号 1988.7. 一荃書房

- 22) 「特集斎藤喜博像に迫る」柴田みね子一ひとつひとつ積み重ねて <事実と創造>127号P24~27 一荃書房1991.12
- 23) 前掲「授業は教師がつくる」田中せつ P123
- 24) 同上 高屋敏江 P185~186
- 25) 斎藤喜博「授業をつくる仕事」P164 ~165 一荃書房1975 前掲「可能性に生きる」P408
- 26) 斎藤は、教師や子どもといっしょになって、自ら汗だくになって石ころだらけの校庭整備に当たった。当時のPTA会長須永氏によれば、会員たちも参加し労力を提供するだけでなく、金銭面での援助をしたそうである。
- 27) 境小 PTA 会長として斎藤を側面から援助した須永久夫氏の回想によれば、斎藤は須永氏にプール増改築費援助のほかに、水泳に秀でたOBの紹介を依頼し、彼らをコーチにして境小の水泳力を強化したそうである。またこの時期境小で学んだ卒業生が、成人してから硫黄島近海で船から夜の海に投げ出され3時間近くを泳ぎ続けて救助されたとき、父親は「小学校時代斎藤先生にご指導頂いた水泳の力が基にあったのです。高校時代でも水泳の記録をとるのはほとんど境小出身の人たちでした」と話したそうである(当時の境小教師 石原栄子の回想一前掲「授業は教師がつくる」P114
- 28) 前掲「授業は教師がつくる」青山園江 P33
- 29) 同上 青山園江 P37
- 30) 前掲「教師が教師になるとき」青山園江 P133~134
- 31) 前掲「授業は教師がつくる」若井幸江 P49
- 32) 同上 大橋武夫 P101
- 33) 同上 高屋敏江 P186~187
- 34) 前掲 柴田みね子「境小こぼれ話(2)」事実と創造 86号 P34~35 一荃書房1988.7.
- 35) 前掲 青山園江「境小こぼれ話(6)」事実と創造 90号 P24~25 一荃書房1988.11.
- 36) 大槻志津江「特集・教育と人間 境小でみた子どもの美しさ」事実と創造 104号一荃書房 P19~22 1990.1.
- 37) 前掲「教師が教師になるとき」高橋元彦 P59~P63
- 38) 同上 P69~P71
- 39) 同上 岡芹忍 P120~121
- 40) 同上 武田常夫 P146~151
- 41) 2009年8月26日午前10時~11時半まで、伊勢崎市境町の長光寺で、主として須永氏から、一部元PTA副会長の大澤和世氏から聴き取りをした。内容の確認は筆者が書き取りながら復唱を兼ねて相槌を打つ形で行った。なおその際、近所に住む元境小教師の青山園江、田中せつの両氏が同席された。また当日午後に境小学校を訪問、1時間ほど現校長の新井弘氏から現在の学校の状況と、当時の保護者、卒業生の話などを伺った。
- 42) 徳川家康の忌日に日光東照宮で行われる大祭に毎年朝廷から派遣される奉幣使(例幣使)通行した道。中山道の倉賀野から分かれ、玉村、五料……を経て今市に達する。奉幣とは神に幣帛を供える行為。繊維製品が供物の中心。他に魚介、酒、米、野菜などの食品類、紙、玉、武器などがある。以上「日本史大辞典」山川出版社1997による。
- 43) 2009年8月17日午前10時~12時に、伊勢崎市境島村公民館で卒業生今井登貴江、大澤亮湛(所用で中途退席)の両氏および島小卒業生関口時人氏から聴き取りを行った。さらに2009年10月17日、伊勢崎市境町長光寺で午後3時から1時間ほど、前回途中退席した大澤亮湛氏から再度聴き取りをした。内容の確認は40)に準じる。
- 44) 聴き取りは、2009年9月2日午前10時から12時半まで、伊勢崎市境島村公民館で行った。質問項目は、文献に記載されていない内容(たとえば島小時代のように、斎藤さんと呼ばせたか、職員会議やPTA会合の後で合唱やソフトボールをしたかなど)、文献に記載されていることの確認と補足質問などからなる。記録は私が筆記し、

内容は私が聞き返したり、記述したメモを確認することで間違いが最小限となるよう心がけた。また内容の確認は40)に準ずる。

45) 2009年9月2日に5名の元境小教師の方々と一緒にお話を伺えなかった高橋元彦氏とは、同年11月7日午後2時から3時半まで彼の自宅（群馬県佐波郡玉村町五料）で聞き取りを行った。重複しない範囲で内容の一部を以下に紹介する。

① 斎藤の業績と手法は彼が公立学校を離れてからも地元教育行政当局は拒否反応を示したそうである。高橋が県の教育センターに1年間研修に向かう時、武田常夫が「絶対に斎藤先生の名前を出したり、境小の成果を口にしないように」と注意されたという。激しい気性の斎藤と異なり、考え方が柔軟なうえ穏やかな人柄で力量もある武田は、県教委からも受け入れられ校長にまで昇進した唯一人の斎藤門下生であった。

② 赴任した当時の斎藤を恐れていた境小の教師たちが、3～4か月すると二時限終了後の15分休み時間に我先に斎藤の周りに集まって教を請うたり、話を聞いたりするようになり、学校改革が加速した。

謝辞

終わりにあたり、本文作成に際し有益な指摘と助言をいただいた、日本教育大学院大学の林義樹教授と花田修一教授、十文字女子大学の横須賀薫特認教授、さらに境小と地元関係者で文献からの引用をさせていただいたり、聞き取り調査や情報提供便宜提供、関係者紹介などご協力いただいたたくさんの方々（含故人）— お名前は末尾に併記 — に心からお礼を申し上げる次第である。

大槻志津江、青山園江、若井幸江、高橋元彦、大橋武雄、田中せつ、岡芹忍、高屋敏枝、岸（柴田）みね子、武田常夫（以上元境小教師）、今井登貴江、大澤亮湛、木村仁（以上元境小生徒）、須永久夫、大澤和世（以上元境小PTA役員）、新井弘（境小校長）、小出省司（群馬県病院管理者）、矢島正（群馬県義務教育課長）、椎名三生（伊勢崎市役所）、栗原寿郎、栗原知彦、佐藤謙吉、関口時人、田島健一、有賀厚子（以上伊勢崎市境町、境島村関係者）。

Research Paper

Investigating the School Management of Saito Kihaku
After Shima Primary School:
Sakai-Higashi and Sakai Primary Schools

Kubota, Takeshi

The main theme of this paper is to evaluate Principal Saito Kihaku's school management method and the results of Sakai-Higashi(1963~1964) and particularly Sakai Primary School (1964~1969) in Gunma-Prefecture, Japan. Prior to his transfer to Sakai-Higashi Primary School from Shima Primary School, he was already one of the most famous principals in Japan due to his brilliant achievement of school reform at Shima Primary School (1952 ~1963). The author has already written two papers on Shima Primary School for Volumes 1(2008) and 2(2009) of *Comprehensive Studies of Education* (this journal of Japan Professional School of Education).

In this paper, the author examined the written papers of Saito and ten former school teachers, and the results of interviews of six teachers, two PTA executives, and two graduates. All of these people were involved at the same period when Saito was working at Sakai Primary School. Through these studies, the author's conclusion is that Saito's school management method and the results were more stable and no less successful than those of Shima Primary School. The teachers' morale and skills, as well as the students' motivations and ability were drastically improved. Therefore, it seems to the author that Saito's heritage is important for all people concerned and interested in education even in the current era.

Key words: Saito, Kihaku, Shima Primary School, Sakai-Higashi Primary School, Sakai Primary School, Teachers at Sakai Primary School, Tsuneo Takeda
